

## 大英博物館と「白い古代ギリシャ」

ロンドンオリンピックが開催された2012年、NHKスペシャル「知られざる大英博物館」が3回シリーズで放送された。とくに印象的だったのは、「古代ギリシャ 白い文明の現実」と題した回で、あの真っ白な彫刻や白亜の神殿が、最近の科学的調査で、実は鮮やかに彩られていたことがわかったというのだった。極彩色に復原された彫像の鮮やかさ、CGで再現された都市のカラフルな映像に衝撃を受けたのは、私だけではないだろう。

番組では、彫刻や神殿が象徴する白い古代ギリシャのイメージがどのように成立したかも追求された。18世紀、美術考古学の祖とされるドイツのヨハン・ヴィンケルマンは、ヨーロッパ芸術の原点としての古代ギリシャ芸術の独自性を美化し、人類が到達した最高の美としてその偉業を讃えた。理想化された高度な白い文明というイメージは、ヨーロッパに相応しいともてはやされ、教育を通して人々のアイデンティティーの基礎となり、産業革命を経て台頭した西洋が世界に対して優位に立つ歴史的根拠のひとつにもなっている。

ヴィクトリア朝には、女王の純白のドレスが純粋性の象徴として流行し、白いギリシャ彫刻も人気を博した。色のついた大理石は冗談か悪趣味とされ、大英博物館では、1938年、有力スポンサーの指示で、パルテノン神殿の「エルギン・マーブル」など、古代ギリシャの美術品が白さを求めて洗浄され、表面が削り取られる事件がおきた。博物館の男性像「デスコボロス(円盤投げ)」は、古代ギリシャの原作(前450～440年頃)をローマ時代に写したもののだが、誤って復原されたまま、1948年ロンドンオリンピックの公式ポスターに採用された。

番組は、古代ギリシャ彫刻の青色がエジプシャン・ブルーを用いていることを紹介しながら、紀元前7世紀に急速に花開いた古代ギリシャ文明のルーツに迫る。そして、250年にわたって歪められた白のイメージから解放され、古代ギリシャの真の姿を解明する作業は始まったばかりだと締めくくる。

## 日本ギャラリーの火焰型土器

同じ2012年7月、オリンピックに合わせ、大英博物館の日本ギャラリーで、新潟県津南町堂平遺跡出土の火焰型土器の常設展示が開始された。少し遅れて正面玄関脇のギャラリーで開催された特別展示「火炎土器—日本の先史土器文化—」では、長岡市岩野原遺跡出土の火焰型土器など2点が展示され、約4カ月間の会期中に11万人を超える入場者を集めた。大英博物館は、来年の日本ギャラリーの一部リニューアルに際して、長岡市岩野原遺跡出土の火焰型土器など4点の常設展示を行う準備を進めている。

実は、豪雪地帯として知られる津南町は私の亡父の郷里であり、信濃川のほとりに眠る父の墓は、毎年、冬の間、3mを超える雪の下に埋もれている。かつて太陽の塔で有名な岡本太郎が最高の芸術と評し、多くの人を魅了する火焰型土器は、こうした雪深い土地の縄文文化が育んだものなのだ。大英博物館の展示室で火焰型土器を前にした私が、少し誇らしい気持ちになったことは白状しておかねばならない。2002年、津南町や長岡市

などが結成した信濃川火焰街道連携協議会は、火焰型土器、縄文をキーワードに、信濃川中流域の市町村の交流・連携、地域振興、広域観光を推進している。現在、協議会が取り組んでいるのは、2020年東京オリンピックの聖火台に火焰型土器の造形を採用することを提案するプロモーション活動だ。今年の10月、五輪担当相に手渡された協議会の要望書は、火焰型土器に象徴される縄文文化は日本文化の源流であり、浮世絵や歌舞伎と並ぶ存在だとして、オリンピックという国際舞台で世界に発信することで、日本文化を大いにアピールできると記している。

一方、長岡市に事務局を置くNPO法人「ジョーモネスク・ジャパン」は、自然と共生して生きる縄文の智慧＝「縄文力」を学び、現代に活かし、平和で希望ある日本をめざすため、縄文モニュメントの設置などの事業を進めている。欧米でも高く評価される縄文文化の力＝「縄文力」を掘り起こし、「日本人的心」に止揚し、磨き上げ、日本人としての自覚と主体性を確立する、といった設立趣旨は少し重たいが、世界各地の多様な個性的文化の理解、人間の根源に関わる真の「人間文化」の原点に接近しようというのだ。



JR長岡駅前の火焰型土器モニュメント(ながおか史遊会 湯本泰隆氏撮影)

また、別のNPO法人「Jomonism」は、自然と共生しながら芸術を花開かせた縄文文化に、現代人が求めるライフスタイルのルーツを見つけ、参加者が楽しみ、その価値観を広めていくプロジェクトを繰り広げ、青森県三内丸山遺跡で音楽フェスティバル「Feel the Roots」を企画したり、ニューヨーク、パリなどでアート展「ARTs of JOMON」を企画制作したりと、こちらは、時間や距離に捕らわれない、軽やかで感性豊かな、コンテンポラリーな活動スタイルが特徴的だ。確かに、縄文を象徴する火焰型土器や土偶の造形的な素晴らしさ、芸術性の高さは改めて述べるまでもなく、それらが何かを伝える力は圧倒的だ。展示ケースに厳かに収まった火焰型土器や土偶は、聖化され、スピリチュアル、宗教的ですらある。アートへのインスピレーションは、岡本太郎ばかりでなく、広く海外に及ぼうとしている。

とはいえ、同時に気になるのは、もしかすると、古代ギリシャの白い彫像と同じように、火焰型土器や土偶の場合も、何か大事な部分を削り落として、磨き上げすぎではないかということだ。かつて明治の時代、食人の風習をもつ野蛮な文化として貶められ、「大和民族」ではなく先住民の所産だと考えられた縄文文化は、今や一転して、日本人の原点として賛美され、レスペクトされている。しかし、手放しで賛美される部分ばかりではないだろう。大英博物館では研究者たちが白くない古代ギリシャを見つめ直し、展示を通して見学者に問いかけている。縄文文化についても、賛美し、崇めるばかりでなく、削り落とされかけている大事な部分を見失わずにいたい。